凍れる樹

井上　靖

講談社版

凍(こお)れる樹(き)

昭和三十九年十一月二十日　第一刷発行
著　者　井上　靖（いのうえ・やすし）
発行者　野間省一
印刷所　星野精版印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
振　替　東京三九三〇
電　話　東京（942）一一一一（大代表）
定　価　四五〇円
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。
著者の了解により検印廃止。
© 井上　靖　一九六四

目次

凍れる樹……五
晴着……六一
北国の春……八五
一年契約……二五

色のある闇……一四五
どうぞお先に……一七七
眼……二〇九
面……二三三
故里美し……二五九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井上靖
作品集

凍れる樹

装幀
畦地梅太郎

凍れる樹

松原辰平は新婚旅行へ出掛ける一人娘のあさ子を親戚の者たちと一緒に駅まで送って行ったが、新郎新婦を乗せた列車の最後尾が、ホームを外れ、ゆるいカーブを描いて次第に小さくなって行き、街の東部の小さい赤土の丘の陰へ匿れてしまった時、自分は何かとんでもない間違いをしでかしたのではないかという思いに取り憑かれた。

妻のさだを喪ったのは十五年前で、あさ子の七歳の時であった。そのあと何回か話もあったが、結局後妻も迎えず、男手一つであさ子を育てて来たが、そのようにして育て上げた一人娘が、こんなにあっけなく、父親の許から離れて行っていいものであろうかと思った。辰平の視線の中には、列車の消えたあと、線路の片側に拡がっている冬枯れた葡萄畑の一部が寒々と置かれてあった。遠くから見ると葉のない葡萄の木はハリガネ細工か何かのように見え、しかもそれがきちんと等間隔に植わっているところは、何となく鉄条網の原を連想させた。

子供を嫁がせた父親の気持には、多かれ少なかれ、同じようなものがあるのであろうが、辰平

の場合は、親一人子一人ということでそれが殊に烈しいようであった。それに本来なら一人娘であるので聟をとるのが普通であったが、あいにく相手の相木も一人息子であり、あさ子がどうしても、その人物と結婚しなければということなので、辰平はやむなくあさ子を手離す決心をしたのであった。その一人息子ということを別にしても、辰平は必ずしも相手の相木という青年に文句がないわけではなかった。恋愛結婚というと人聞きはいいが、自分の知らない間に娘と交際して、一言の挨拶もなくさっさとあさ子の心を取上げたようなもので、父親としては当然そこに多少の言分があった。

官立大学出の工学士で、一流会社のこの町の支社へ勤めていることは、まあいいとして、相木の背の高いところにも、薄い唇が女のように赤いところも、色の生白いところも、話す度ににこにこするところも、口のきき方に甘えた調子のあるところも、要するに娘のあさ子が夢中になってしまった相手の青年の特長の全部が辰平には気に喰わなかった。

それからまだある。どうしてあんな細いズボンを履くのだろう。ズボンが細い上に、いつかレインコートを半分にちょん切ったようなコートを纏ってやって来たことがある。親から貰った自分の躰というものはあのような変梃な衣類で包むものではないのである。

要するに松原辰平にとっては、相木という二十九歳の青年が自らを構成している、肉体的精神

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

的諸条件の総てが、甚だ不満足だったのである。そして、その相木が娘のあさ子を列車へ積み込んでどこかへ持って行ってしまったのである。さんざん金を費わせ、荷物もろ共、どこかへ拉致して行ってしまったのである。

辰平は見送ってくれた人たちに、一応礼を述べて、待たせておいた自動車へ乗り込んだ。どうせ家へ帰るのだから、一緒に乗せて帰った方がいいに決まっている者が何人か眼についたが、辰平は自分一人だけくるまに乗り込んで、直ぐ扉を閉めた。一人になりたかった。くるまが走り出そうとした時、わざわざ式のために横浜から出て来た妹が、

「兄さん、乗せて行って下さい。——相変らずせっかちね」

と言って、くるまの扉を開けて飛び込んで来た。この二、三年躰がやたらに肥り出しているので、たちまちにしてクッションが軋んだ。

「まあ、これで、御安心ね。——いい人じゃない？」

「うん」

「この頃の若い人は、私たちの時とは違ってしっかりしてるわ。自分であんないい相手をちゃんと探して来るんですからね。——兄さんになど探さしたら、とてもあんなすばらしい人は見付けて来ないわね」

それには答えず、辰平は不機嫌な顔で言った。
「いやに肥り出したな。税金がつかないと思って」
「お母さんに似たのね」
「おふくろはそんなに肥ってはいなかった」
「あら、ひところのお母さんの方がもっと肥ってたわ」
「そんなことあるもんか。——おふくろの方は背が高かったのでまだ見られた」
「ひどいわ」
「ひどいわって、本当のことを言ってるんだ」
妹はだまってしまった。辰平はこれで敵討ちをしたと思った。
家へ帰ると、親戚の者が礼服姿で、どの部屋にも姿を見せていた。辰平はたれも居ない座敷の縁側へ出て、そこの籐椅子に腰を降ろした。先刻妹の悪口を言ったが、自分も最近肥り出して来ている。モーニングの膝が張って、腰を降ろすと窮屈である。百坪程の庭の中央のあちこちに、四季咲きのつつじの株が散らばっていて、それが少しずつ違った色の花をつけ始めている。庭の隅には欅の老樹が一本突立って、冬空に傲然とみごとな枝を張っている。その欅の裸の梢に投げるともなく視線を投げながら、辰平は、俺はだんだん人間より植物の方が好きになるなと思った。

あさ子の結婚の話が持ち出され始めてから、毎朝のようにこの欅の木を眺めている。自分ながらよく倦きないと思う程、この木許り眺めている。中央本線に沿った人口三万のこの小さい都市では、個人住宅にある樹木ではこれが一番立派ではないかと思う。結婚の話が持ち出される前は、欅の木などはいっこうに眼につかなかった。あさ子にお茶を運ばせて、それを飲むのが一番の楽しみであった。欅の木などのことを考えなくても、あさ子のことで幾らでも自慢することがあった。

学校の成績も良かったし、バレーの選手だった。それに背が高くて、何とかいう映画女優と生き写しだと言われた。一度、その映画女優の写真を見たことがあるが、父親の慾目か知らないが、あさ子の方がずっと綺麗だった。そのあさ子をさらって行きやあがったー　辰平は欅の木を見詰めながら、口の中で呟いた。

「いいお聟さんじゃないですか」

亡くなった妻の弟で、この町の商事会社の重役をしている弟がはいって来た。あさ子にとっては唯一の母方の叔父である。

「うむ」

辰平は弟の方は振り向かないで言った。

「あさ子ちゃんの方が照れないで、聟さんの方が照れていた。ありゃあ、かかあ天下になりますよ」

その言葉で、辰平は眼をむいた。併し、言葉だけはさすがに抑えて口から出した。

「そんなことあるもんか」

「いや、性格は母親似であさ子ちゃんの方が強い。おとなしいですよ、聟さんは。——ありゃ、いい聟どのだ。点をつけると、まあ九点だな」

「九点!? 俺は四点だ」

「四点、どうして? 気に入らんですか」

初めて弟は辰平の表情に気付いて言った。

「気に入らんとは言わん。たとえ気に入らなくても、大事な娘を嫁にやった許りだからね」

「そりゃ、そうでしょう。嫁にやったもやった、いま新婚旅行へ送り出して、家へ帰って来たばかりですからね」

「そう、だから、何も言わん」

「変な言い方ですね。何か気に入らんことがあったんですか」

「別にない」

「じゃ、どうしてそんな言い方をするんです」
「気に入らんと言えば、みんな気に入らん」
「どんなところが気に入らんです」
「何もかもだ」
「無茶ですね、そんな言い方。どこがいかんです」
そう問い詰められると困った。言い出したら、結局、相手の全存在を否定しなければならぬことになる。いいところも悪いところもみんな気に入らないのである。
「まあ、いい、辛棒する」
「そりゃ、辛棒しなくちゃ。——こっちだって欠点はあるでしょうから」
「欠点って、だれに？」
「あさ子ちゃんですよ。だれだって探せば欠点はありますよ」
「あの子にあるか」
「困っちゃうな、兄さんには。——父親一人だから一緒に住むようにって、聟さんの方は言うが、それに反対するのはあさ子ちゃんの方ですからね。わがままですよ、少し。あまり甘やかせて育てるから」

「あさ子はあの青年と交際し始めてから、そんなになったんだ。一体君は俺に意見をしに来たのか」
「冗談じゃない。式に来たんですよ」
弟もむっつり言った。
「下手な謡いをうたいに来たのか」
すると呆れたように、
「兄さんは少しどうかしてる。頭を冷やした方がいいですな」
弟は憤然として出て行った。辰平の方もまた憤然として椅子から立ち上って、部屋を一廻りして、また椅子へ坐った。五、六歳の子供が二人部屋へ駆け込んで来た。東京の親戚の子供たちである。
「だめ、だめ、そっちへ行っちゃあ、おじいちゃま、御機嫌悪いから」
そんな声が聞えて来た。先刻自動車に一緒に乗った妹の、すぐ上の姉の声である。子供たちはその孫たちらしい。辰平はやかましいと呶鳴りかけた声を呑んだ。それにしても、おじいちゃまとは何事であるか。自分の孫かも知れないが、俺の孫ではない。俺をおじいちゃまと呼ぶ権利のあるのは、あさ子が将来生む子供たちだけである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com